

目次

第一章

読書と知

7

読めば教養人になれるという錯覚／ベストセラーは読むべきか？／芥川賞・直木賞はひとつのファッショ／再読の機が熟すとき／心を開いて本を選ぶ／本は捨てないほうがよい／自腹を切って得られるもの／本との出会いに多様性を持つ

第二章

読書法あれこれ

37

図書館では本を読めない／随時読む、同時に何冊も読む／記憶にとどめる読書法／スロリーディングのすすめ／書評の使い方、書き方／翻訳書を読まない理由

第三章

人と本

59

読書以前に大切なものがある／「読書会」は高級な暇つぶし／ペナック先生の朗読のススメ／本棚は脳味噌の延長である

第四章

古書ことはじめ

古書通信販売サイト 利用ベスト3／「書縁」を結ぶ古書店と、中古本屋／値切ってはいけない／身の丈に合ったコレクションを／書物の形について／重複所蔵を恐れるな／古書店と鮎屋は顔を覚えてもらってからが楽しい／ローカル出版の密かな楽しみ／古書の世界を逍遙すると／ボール表紙本との出会い／我々の先祖は本を読まずにはいられない人たちだった

79

第五章

真髓は古典にあり

古典で知る読書の醍醐味／古典文学を広めた江戸時代の出版／注釈書によって変わる作品の解釈／新しさと読みやすさは必ずしも一致しない？／自分にあった古典全集を求めて／いま、古典の全集が担う役割／古典の教えかたについて思うこと／古典に見る人間の普遍性／恋愛文学が残らなかった中国／平安女性の「罵り文学」／『平家物語』の凄み

119

第六章

耳の読書

森鷗外と宮沢賢治は朗読したくない／本居宣長の『源氏物語玉の小櫛』を朗読してみる／兼

161

好法師が綴った読書の心

第七章

書物はどこへ行くのか

日本で電子書籍が普及しない理由／書姿にこだわった日本人／書体、装訂、余白の意味／日本人の「紙の書物」への愛着／本を「我が物」にするということ／年に一度、本棚の整理／本を状態良く保管するために／自分史の象徴としての書棚

いや、べつに読まなくても……。——あとがきにかえて

春の暮^くつかた、のどやかに艶^{えん}なる空に、いやしからぬ家の、奥^{おく}ふかく、木立^{こだち}ものふりて、庭に散りしをれたる花、見過^{みす}ぐしがたきを、さし入りて見れば、南面^{みなみおもて}の格子^{かうし}、皆おろしてさびしげなるに、東に向きて妻戸^{つまど}のよきほどにあきたる、御簾^{みす}のやぶれより見れば、かたち清^{きよ}げなる男^{をとこ}の、年^{とし}廿^{はたち}ばかりにて、うちとけたれど、心にくゝのどやかなるさまして、机^{うへ}の上に文をくりひろげて見たり。

いかなる人なりけん、尋^{たづ}ね聞^きかまほし。

兼好法師『徒然草』第四十三段

※『岩波古典文学大系30』（岩波書店・一九五七年）に拠る。

第一章 読書と知

読めば教養人になれるという錯覚

教養とはなんだろうか、インテリジェンスとはなんだろうか、まずはそのところから考え始めることにしましょう。

そもそも、「もの知り」であることは、インテリジェンスの必要条件ではありませんが、十分条件ではない、ここを押さえておかないといけません。何も知らないで物事を考えることはできませんから、たとえば歴史や言語、また、日本人としての最低限の常識などをもっていて然るべきでしょう。そうした知識を、本を読むことで得られるのは事実です。したがって、多くの本を読んでいる人は、もの知りであるとは言える。しかし、ただ知っているだけ、つまり知識がただその人の脳細胞に記憶されているだけで、その精神になんの影響も与えていなければ、それは生きた知識ではありません。言い換えれば知恵になっていないのです。

あれも読んだ、これも読んだと多くの本を読んだことを喧伝けんでんする人がいますね。「月に五〇冊は読みます」とか自慢する人、「一日に二冊ずつ読んでいる」などと豪語する人、もしかするとあなたの周囲にもいるかもしれません。

でも正直に言うと、そういう人に限って、あまり深みのない人物であつたりします。む

やみに読んだ本の量を自慢する、そういう読書は、インテリジェンスを涵養かんようするのではなく、ペダントリー (pedantry: 学問や知識をひけらかすこと、げんがくへき 銜学癖) への道をつ走っているように思います。「オレはもの知りだろう」と片々たる知識をひけらかすオジサンなどは、傍はたから見たらあられもなく感じられ、敬遠けいえんしたくなりますね。

そうならないために、同じ読むなら、それがペダントリーではなくインテリジェンスへの道を行くようにしたいと、私は思うのです。

では、そうするにはどうしたらよいのか。

まず大切なのは、「読んだ本の内容について考える」ことです。読書がその人の叡智えいちの形成に作用を及ぼすとしたら、それはたくさん読んだからではなく、本にまつわる「考える営為」のゆえである。だから大切なのは、考え考え読んでいくことなのです。

この考える営為は、読んでいる最中のみならず、読む前にも必要です。自分はいま何が読みたいのか、自分にとっていま何が必要なのか、ということをよく考えてから読み始めることが大切なのです。内的な契機のない読書に意味はないと私は考えています。

量を誇る「読書家」のなかには「キミは、こんな本も読んでいないのかね」などと、相手を威嚇いかくする人がいます。

江戸時代中期の儒者三浦梅園は「学文は置き所によりて善悪わかる。臍の下よし、鼻の先悪し」と、なかなか洒落た教訓を残しています。同じ学ぶなら、その学んだ事、読んだ事を、ぐつと臍の下に置いておきたいものです。しかし、鼻の先に「知識」をぶら下げた人物から、そんなふうに言われたほうはコンプレックスを感じ、読まねばならぬような強迫観念に襲われることがあるかもしれません。けれど、興味のない本を読んだところで、まあ、なにもなりません。その読書に費やした努力と時間は、結局無駄になります。

興味を持って読み始めた本でも、実際にはあまり意味がなかった、そういう無駄読みということも少なくありません。しかし、人生の時間は有限ですから、できるだけ無駄は減らしたいものです。

そうすると、いま読むべき本はなんなのか、いま自分にとって必要な知識はなんだろうか、ということを目頃から思いめぐらして、それにしがたって読む本を選ぶというプロセスが、読書の前提条件として大切です。それなくして、ただ学校の課題図書だからとか、物知りオジサンから「読んでいて当然だ」と言われたとか、そういう外から与えられた情報のみで本を選ぶと、結局は自分の血肉にはならず、むしろペダントリーへの道を行くことになりがちです。

同じ時間を費やし、同じ努力をするなら、他人はどうあれ、自分にとって「心の栄養」となるような本を読んで、豊かなインテリジェンスへの道を行きたいものです。

そこでまずは、自分が何に対してもっとも興味を感じるか、と考えるところから始めましょう。

歴史の本であれ昆虫の研究書であれ、自分の興味のある分野の本をまず一冊手に取ってみる。その本から一つでも新しいことを知ったり、面白いなあと感動したら、その本のかで紹介されていたり引用されていたりする別の本を読みたいという欲求が出てくるでしょう。あるいは、一つの事象について、ちょっと別の側面から眺めてみたいという思いが、新しい分野の読書へと導いてくれるかもしれない。良い読書とはこのように、内的な契機から発展して、生きた知識が上積みされて好循環をなしていくものなのです。

ベストセラーは読むべきか？

内的な契機のない読書には意味がないと考える私にとって、マスコミ、とくにテレビなどが喧伝するベストセラーなどというものは、じつにうすっぺらな現象に見えます。

現代のベストセラーは、テレビや雑誌などのメディア・ジャーナリズムによって「作ら

れる」側面が多分にあります。芥川賞だの、直木賞だの、あるいは本屋大賞だのと陸続として「作りだされる」ベストセラーの数々、あるいは影響力のあるタレントがテレビで薦める「この一冊」というもの。こんなことによって、翌日から本屋で突然売れ出すということが、実際に起こり得るわけです。

これに対して明治時代くらいまでは、面白かったという感想がじわじわと口コミのような形で広がって、たとえば『吾輩は猫である』などが、ベストセラーになっていった。テレビのようなマスメディアが存在しなかったから当然なのですが、今と昔とでは、ベストセラーの生まれるプロセスがまったく違っていました。

要するに現在は、メディアにのせられて、読む必然性のない人たちまでが読むことによって、ある種の本がベストセラーになっている。ひと言でいえば、こうした現代の「作られたベストセラー」を読む必要はないと私は考えます。

いや、その本が、内的にどうしても読みたい内容だと思ったら、ぜひ読んだらいい。しかし、ただテレビで言っていたから、みんなが読んでいるから、本屋に山積みになっているから、などの理由で本を買うというのは、まあよししたほうがいいと思います。

昨今、大ベストセラーになっている本を、たとえば五〇年後に、覚えている人はどれだ

けるでしょうか。きっと図書館には残っているでしょう。けれど、長い年月読み継がれる本は、現実には多くないのです。

もちろん最近のベストセラーのなかにもすばらしい作品はあるのかもしれませんが、「長い年月の批判」に耐えて「古典」となるような本は決して多くはないのです。いわゆるベストセラーが、一種の流行現象である以上、時間によって淘汰とうたされていくのは避けられない運命だからです。

流行現象を牽引けんいんする洒落たターム (term: 術語) というものが、昔からありました。

私の学生時代には「実存主義」が大流行して、フランスの哲学者、ジャン・ポール・サルトルなどがもてはやされていました。けれども今サルトルを読む人など、どのくらいいるでしょうか。その頃の流行の最先端を行っていた日本の実存主義作家は安部公房あべこうぼうでしたが、高校生だった私は、『砂の女』『他人の顔』なんて作品を読んで、なにかこう精神の栄養を得たような、少し大人になったような喜びを感じたものです。では、いまの私に、その読書がなにか影響を与えているか、と自問すると、正直に言えば、なにも残っていません。たぶんそれは、流行を追いかけて読んでみたけれど、私の心には読む必然が用意されていなかったことを意味するのだと思っています。

その後「構造主義」がやってきました。それからさらには「ポスト構造主義」などなど。こうした流行の喧伝にひと役買う文化人というのはたくさんいて、メディアに出てきていかにも偉そうな態度でもの申しますから、そうか、読まなきゃいけないのかと、条件反射的に手に取る人も出てくるでしょう。

おそらく、明治時代の旧制高校生などは、デカルト・カント・ショーペンハウエルなどと唱えて、ドイツ哲学などを齧^{かじ}っては、解ったような顔をして大いに議論の熱を吹いたのだと思いますが、それは私どもの祖父母の時代の流行で、今では、哲学専攻の学生でもなければ、ほとんど読む人はいないことと思います。私もまったく読んでいません。

こうしたことどもも、しよせんは流行です。かかる流行の一現象に過ぎぬものは、二〇年、三〇年と時間が過ぎると、ほとんどの人は忘れてしまい、ターム自体が過去の遺物になつてしまうことは歴史が証明しています。

一方で、ヒューマニティ（人間性）の根幹にかかわる本は必ず後世まで継続的に玩味^{がんみ}され、そのすぐれた作品は真の意味での「古典」となります。物事を考えるよすがになったり、感情が揺さぶられたりする本、そうした本は、ヒューマニティというものの自体が不易のものである以上、時間の淘汰^{とうた}を経て残つてゆくものです。

人生は短いことから、できるだけそういう年月の淘汰を受けた本を読みたいと私は思います。先に述べた、なんとか主義を触れ回るような文化人は、はたして、『源氏物語』をきちんと読んでいるのだろうか。一時の流行書と、千年読み続けられた書物のどちらが大切か、私にとっては論を俟たず、古典です。つまり、ベストセラーは読まなくていいが、真の古典は読んだほうがいい、そういう立場です。

世の中には常に最先端を知っていることに価値をおく人もいますから、そういう内的動機からベストセラーを読むのは、それはそれでいいと思います。人それぞれ、読書のモチベーションは違っていい。そういう人から見ると、古典ばかり読んでいる私のような人間は、さぞ不勉強に映るでしょう。そう思われたところで痛くもかゆくもないのですが。

芥川賞・直木賞はひとつのファッション

ベストセラーを読まないのと同じ理由で、私は、芥川賞・直木賞作品を読みません。私にとって時間の無駄だからです。

もちろん読みたい方は読めばいいのです。読書においてもっとも大切なのは、すでに述べた通り、自分が読みたいもの、自分にとって必要だと思うものを読むことです。世の中

にはこれだけ多くの本が出版されていて、かつ人生の時間は有限なものですから、自分が本
当に読みたい本のみに時間と労力を費やして、他人が何を読んでもいようと一切気にしない、
これが私の読書スタンスです。

書物の価値は、畢竟「時間」が決めてゆくものです。

出版されてから三〇年、五〇年と年月を経て、それでも多くの人が手に取るものであれ
ば、それはヒューマニティの根幹にかかわる何かが描かれている書物であり、いつまでも
色あせずに古典として残る書物だといえる。そういう本を私は読みたい。

それに対して、現在の芥川賞・直木賞作品というのは、私から見れば一つのファッショ
ンに過ぎません。鳴り物入りで出版されて、メディアでも一時しきりに報道されますが、
それらを一〇年後に覚えている人がはたしてどのくらいいるか。三〇年後に読む人がどれ
だけいるか。大いに疑問です。

私の若いころに大ベストセラーになり一世を風靡した柴田翔『されどわれらが日々——』
(二九六四年)や、庄司薫『赤頭巾ちゃん気をつけて』(一九六九年)などを、今の若い方はま
ずほとんど読まないことでしょう。

皆がロレックスの腕時計を持っているから自分も欲しくなる、というような付和雷同の

精神を、私はまったくも合わせていません。二〇一五年に大いに話題になった又吉直樹さんの小説もちょっとだけ見てみましたが、すぐに読むのをやめてしまいました。私には読む必要のない本だと思ったからです。

私にとって読書は、広い意味での娯楽です。読んでいて楽しくなければ意味がないのです。そして楽しくさえあれば、なんの役に立たなくなっただけいいと思っています。ここです。「役に立つ」とは、プラグマティック（実利的）な意味においてです。

「これを読むと五分で記憶力が増進する」とか、「一カ月で不動産鑑定士に合格する」とかいような、いわゆる実用書は、読めばそれなりの役に立つかもしれませんが。あるいは、インターネット上にちらばっている料理のレシピを集めて編集しただけの本なんてのも、どんなベストセラーになるかもしれない。

しかし、そういう本をいくら読んだところで、それは私にとって「読書」ではない。一時的に知識を詰め込むためにマニュアルを読むのと変わらない営為に過ぎないのです。

道具という意味ではなんの役にも立たないけれど、それでも、内的な契機に突き動かされて、やむにやまれずに読んでしまう、それがほんとうの読書ではないかと思っています。

役に立たない読書
林望・著

発 行：集英社インターナショナル（発売 集英社）
定 価：720 円（本体）＋税
発売日：2017 年 4 月 7 日
ISBN：978-4-7976-8009-6 C0295

ウェブでのご予約・ご注文は [こちらにどうぞ！](#)